



Title	ヨーロッパの「老い」：スーパーマーケットの虫眼鏡：イタリア・オーストリア編
Author(s)	堀井, 富士子
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 53, p. 19-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83730
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヨーロッパの「老い」

— スーパーマーケットの虫眼鏡 —

～イタリア・オーストリア編～

大阪府寝屋川保健所長 堀井富士子

フランスからイタリアへ

7月2日パリのシャルル・ドゴール空港第一ターミナルからAZ335便で長靴形の人口過密国(世界第9位)のイタリア・ローマ・フィミチノ空港(別名レオナルド・ダ・ヴィンチ空港)へ到着した。黒い髪、黒い瞳の国民はヴァカンスに入り北部へ大移動したあとで、道路がガラガラであった。

古代ローマ帝国からの古い歴史と偉大な遺跡を誇るイタリアは、すでに1930年老人国へ突入し55年がたっている。2000年には世界第一位の老人人口の高率国になる推計が出ている。

国民の保健サービス機構(略称S.S.N.)

イタリアは国家経済の慢性赤字国である。中央の保健省は権限を大部分管轄外にわたさず、調整役しか持っていないから、いつもその場しのぎをしているそうである。

1950年頃から市民参加の中で医療改革運動がおこっており、近年になって特に薬剤支出と病院支出の増大のため遂に保険財政の赤字は限界をこえてしまい、1980年新しいS.S.N.の実施にふみきったのである。S.S.N.の第2条に、これを実現するための方法が書いてあるがその中をひろってみる。

S.S.N.第2条

(f) 高齢者を社会の片隅に分離してしまうことにつながる諸条件を予防・除去し高齢者の健康を守ること。

(g) 予防を重視し、あらゆる形の差別と隔離を排し、更に治療措置における特殊性を取り除く方法で、精神医療サービスを一般医療サービスの中に組み入れ、精神障害者の回復と社会復帰を促進すること。

これらをみていると、我々と同じようなことを問題にしていることがよくわかる。

S.S.N.の今後は容易な道ではなく、20年以上の議論のうえに成立しただけに実際の移行手続きは相当おくられているとのことである。

スリと自殺

ローマ市内にあるバチカン市国は、人口1,000人の世界最小の独立国家。ここにカトリック総本山サンピエトロ大寺院があり、ローマ法王ヨハネパウロ2世がおられる。紀元319年、聖ピエトロの墓地とされ、その後1452年から1626年まで200年近くかけて本格的教会として完成した。世界に5億5千万人の信者をもつ。寺院内の壮大な雰囲気、調和美に心をうばわれ、バスに乗ってからも、人間の力と命をあらためて考えさせられていた時、またまたバスのガイドさんから何回目かの注意!!「くれぐれもスリに御用心下さい。ハンドバックは胸に両手でかかえて下さい——。」パスポートもお金も我々全員ホテルのセーフティボックスに預けさせられ、小銭しか持ってない外出なのに、これだけ気を使ってくれる。(毎年この視察団でも誰かやられるそうで) そういえば、おじいさんがしっかりとおばあさんの手

をにぎってスラれないようにして通っていったっけ。



◀しっかりとおばあちゃんの手をにぎって

「イタリアには外国人がたくさん住んでいる。彼達は慢性不況で失業し食べていけないので観光客をねらっている。警察に言っても、とられる方が悪いと相手にしてくれないから注意するだけだよ。」と専用バスの運転手さんが教えてくれる。彼は純粋なイタリア人と自称し、「イタリア人は個人主義と言われているけど、本質的には楽天家で歌好きで素朴で親切、少しスローモーだが、おしゃべりが大好きお人好しである。だから貧乏でも、年老いてもけっこう楽しく生きる方法を知っている。虚無とか深刻とかクヨクヨには縁がない。」とも言っていた。

なるほど！ヨーロッパで一番自殺の少ない国である（死因第14位）。

太陽の国

太陽の高速道路をナポリへ南下すること3時間。そこから水中翼船で南方洋上35kmにある世界一美しい島カプリ島のマリーナ・グランデ港へついた。

15kmの小さな島は岩と断崖と松とオレンジの樹でおおわれていた。あやしい魅惑の世界に引きずり込んでくれる「青の洞窟」は、ミステリアスな美の世界を持つ。世界中の金持

ちの別荘が、山上に並んでいることがうなずける。

アジサイ、ブーゲンビリアが咲き乱れるペランダで、老夫婦と少女をみかけた。白い太陽と青い風が「明日」をはこぶ幸せな「老い」をみた。

ナポリの現地ガイドのおじいさんは、70歳近いとか。この仕事をもう40年近くつづけているボスだそうだが、死ぬまでつづけると張り切っていた。彼のあだ名は「マフィアのボス」。シルバー人材ですごい力をもっているそうである。これも幸せな「老い」の姿であろう。

下町のダメオ・パタッカに、カンツオーネを歌う老父と息子つきの夕食に出かけた。歌うことが楽しくてたまらない老父にギターをひきながらハモってあげる息子。美声と声量がすばらしい。下町の幸せな「老い」であった。

そんなことばかりうらやましがってる日本からの旅人は、トレヴィの泉でスナップ。なんとローマの女の子に「おばあちゃん今日は!!」



◀トレヴィの泉で

イタリアからオーストリアへ

7月4日空港爆破さわぎで午前3時にモーニングコール。早朝ローマからミラノへ飛び、再びOS282便に乗りかえてオーストリアのウィーン・シュベッヒャード空港にたどりついた。

飲料水よし、治安よし、気温23℃、湿度快適と昨日までがうそのようである。

30の宮殿、30の寺院、150の博物館をもつ森の都ウィーンは建築、美術、音楽などに誇り高く、国民はデリケートで保守的であると聞かされた。国民の90%はカトリック信者。

田園交響曲

7月5日ウィーン厚生省とルドルフ・スティフ慈善病院を公式訪問した。

厚生省では各統計を示され、国民の健康をめぐる問題について説明があった。

35歳以上人口割合が日本の2倍で、今回の訪問国の中では、1980年最も老人人口比率の高い国であり、東ドイツ、スウェーデンに次いで世界第3位の15.5%を示していた。しかし、男の平均寿命はまだ70歳に到達していない。

病弱老人と精神疾患の増加が、最近特にめだちだして検討中であるが、病弱老人については、人間的にも経済的にも、在宅ケアを最良とすることが明白になり、訪問看護婦をふやし、活動を充実させている。その身分は、公務員である。

公害では排ガス問題、この秋から陸上トラックの荷物輸送を制限し、鉄道使用とする事に決めた。また、すべての車を、信号停車でも停車時は必ずエンジンをとめることになった。

バイクタイヤも、ほこりをまきちらすので近く使用禁止とする。すべて、ウィーンの森を守るためにつながる。

慈善病院は、1866年ハプスブルグ家が貧困対策で建てたもので860床。当時は、大規模なものであった。その後何回かたてなおし、今の建物は1977年に完成し、870床のほぼ前と同じ規模。しかし、現在は患者増に悩み、8人部屋を10人部屋にとか、職員用の室を病室に改造し、1,000床とした。このことは、空調設備も職員の労働条件もすべてに苛酷であるが、患者を見捨てることができないという慈善で、皆ががんばっていると説明を受けた。

自国の使用する石油の2/3は産出するし、経済的にもそれほどひっぱく感はない。

叙情豊かな田園、果てしなく続くぶどう畑とドナウ河、ウィーンの森のグリーンチング村、森林公園などの豊かな森。さすがベートーベンの田園交響曲発祥の地は、人の心も豊かに保ってくれるのであろう。

大音楽家の墓と辻音楽士

大音楽家が永眠している、ウィーンの中央墓地を訪れた。ここは同時に、ウィーン市民墓地でもあり、公園墓地として、市内南東ベルベデール宮殿近くの一等地に、広大な森林が存在するのである。

シューベルト、ベートーベン、ブラームス、シュトラウス父子、みんな静かに大地にかえっていた。門から近い茂みの中に、それぞれ彫刻をあしらった有名音楽家の墓が並び、周囲は芝生と花壇でかまれている。交通は便利、公園内は実に広々として、木影に十分なベンチが置かれている。

墓の前に立ち、語りかけている老婦人、小さな包みを横にして、ベンチに憩う老婦人、市内とは思えない静寂な緑の画であった。門前には、花屋が10数件並び、毎日おまいりの人で忙しく、また、老人が多いので救護所も作られている。情熱を内に秘め、悲愁をこめて人生の挽歌が聞こえてくるような、音楽の都ウィーンの中央墓地であった。

おそい夕暮れ（日没9時30分）食後の散策に聖ステファン大寺院へでかけた。137mの尖塔と、色タイルモザイクの急勾配の大屋根のゴシック建築に思わず見とれていたら、どこからともなく、ヴァイオリンの音が――。そのあたりの辻々で、未来の大音楽家たちが奏ではじめていたのである。街路樹の下ベンチで肩を寄せあう若者にまじって、「若い」も仲よく音楽に耳をかたむけている。

さすが、音楽の都ウィーンならではの風物詩である。